

日常的解離としての空想と攻撃性の経時的関連

岡田 太陽 神戸学院大学大学院心理学研究科 竹田 剛 神戸学院大学心理学部

The temporal relationship between fantasy as a form of everyday dissociation and aggression

Taiyo Okada (*Graduate School of Psychology, Kobe Gakuin University*)

Tsuyoshi Takeda (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

本研究では空想と攻撃性の経時的関連の検討を行った。大学生 161 名（男性 60 名，女性 101 名）を対象に BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙と最近の空想内容についての質問紙を用いて 1 週間毎の縦断調査を行った。2 時点の各攻撃性と空想内における自傷度について，交差遅延効果モデルでの分析を行った結果，2 つの過程が明らかになった。一つ目は敵意が高い場合，同時点の空想内で自身の心が傷つくという形で現れ，1 週間後も同様に自身の心が傷つく空想を行うという過程である。二つ目は身体的攻撃が高い場合，同時点の空想内で自身の身体が傷つくという形で現れる一方で，短気が高い際は空想内で自身の身体が傷つきにくくなる。そして，自身の身体が傷つく空想を行った場合，1 週間後も同様に自身の身体が傷つく空想が行われ，同時に言語的攻撃が低くなるという過程である。これらは，防衛機制と各攻撃性の機能の観点で説明することができ，攻撃性の原因となる欲求不満や被害，その攻撃性の機能に影響を受け，空想内の自傷として現れると考えられる。

Key words: everyday dissociation, fantasy, aggression

キーワード：日常的解離，空想，攻撃性

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2025, Vol.8, No.1, pp.21-28

問題と目的

解離とは，DSM-5 では解離症群とされ「意識，記憶，同一性，情動，知覚，身体表象，運動制御，行動の正常な統合における破綻（disruption）および/または不連続（discontinuity）」という特徴を持つと定義されており，この解離体験のしやすさは解離傾向と呼ばれている。しかし，この解離は健常者においても，空想などの比較的軽度で一時的な体験としてよく生じるとされている（田辺，2002）。このような健常者が日常的に経験し得る解離は日常的解離や非病的解離，正常解離とされ，「うわの空・空想」「没頭・没入」「自動的行動」「同時行動」「出来事の詳細健忘」「近距離への遁走」「自己の客体化」「感覚の鈍化」の 8 つに分類できるとされる（舩田，2008）。

この日常的解離については様々な角度から検討が進んでいる。日常的解離は葛藤の解消や感情のカタルシスといった感情制御に関する適応的機能を持つとされ（Putnam，1993），一方で大学生に対する質問

紙調査では，未成熟な防衛機制である「極端思考・他者攻撃」との中程度の正の相関が報告されている（吉住・村瀬，2008）。さらに，男性受刑者を対象とした研究では，解離経験は自傷行為といった攻撃性や衝動性を含む不適応と関連することが示されており（Matsumoto et al., 2005），同様の結果は女性の入院患者を対象とした研究でも確認されている（Zlotnick et al., 1996）。このように解離は適応的側面と不適応的側面の両義性を持つと考えられる。

ここでいう攻撃性について本研究では，他の個体に対して危害を加えようと意図された行動を引き起こす内的過程を指し，Buss & Perry (1992) の枠組みに従い，行動（身体・言語）・感情（短気）・認知（敵意）からなる多面的構成概念と捉える。なお，本研究で攻撃性を測定する BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（Buss-Perry Aggression Questionnaire 以下 BAQ と略記；安藤他，1999）でも同様に，攻撃性は「短気」「敵意」「身体的攻撃」「言語的攻撃」の 4 下位尺度で

構成される複合的症候群とされる。また、「短気」は怒りの喚起されやすさや抑制困難さ、「敵意」は他者への否定的態度や不信感、「身体的攻撃」は暴力への衝動や正当化、「言語的攻撃」は自己主張や議論傾向を示す。

これらを踏まえると、解離傾向が高い場合には攻撃性も高いと推測され、解離は間接的に攻撃性を把握する指標となり得るのではないだろうか。しかし、解離症群で定義されている病的解離は自覚していないなどの理由により隠蔽されてしまうことも多いとされ (Steele et al., 2016)、観測が困難な可能性がある。また、一般人口のうち高い解離を持つのはごく一部であることも示されている (Maaranen et al., 2008)。さらに、ストレス障害や愛着障害といった他の要因の影響も強いいため、実証研究に利用することは難しいだろう。他方、日常的解離は比較的軽度で一時的な体験としてよく生じるとされ (田辺, 2002)、意識・記憶・同一性・知覚・運動・感情の遮断・喪失が一時的・限定的なもの。本人に自覚があり、それらの体験から自分の意志である程度戻ることができる統制性のある解離であると定義されている (舩田, 2008)。このことから、日常的解離は病的解離よりも研究対象として扱いやすく、攻撃性との関連を検討する意義があるだろう。

Ludwig (1983) は解離を効率的な生活のための行動の自動化を可能にする適応的機制とし、その適応性が破綻した場合に病理化に至ると論じている。また、行動の自動化は、複雑な学習行動や本能的行動を意識外で制御することであり、それによって他の行動を同時にできるという利点があるとしている。以上のことから、日常的解離の中でも「自動行動」や「同時行動」は効率的な生活のための適応的な機能と考えられ、これらが攻撃性と関連する可能性は低い。したがって、日常的解離の中には攻撃性と関連する解離とそうでないものが存在し、分類が可能であると考えられる。

なお、日常的解離の下位分類について、舩田 (2008) の研究によると、「出来事の詳細健忘」「自己の客体化」「感覚の鈍化」は外傷的状况に起因し、「没頭・没入」「自動的行動」「同時行動」「近距離への遁走」も行動や状況を契機として発現するとされる。これら 7 つの下位尺度は外的要因に依存する傾向が強い一方、「うわの空・空想」は比較的内的要因に基づくと考えられる。特に空想は意識明瞭でありながら夢のように無意識的かつ自由な内容を含み、個人の内面を反映しやすい。また、従来研究では「うわの空」と一括して「何か他のことを考える」と広く扱われてきたが、その場合は予定など現実的な思考も含まれるため、空想の自由さが十分に捉えられない。そこで本研究では、思考内容を整理し、現実的に起こり得る内容を「想像」、現実には起こらない内容のうち自覚のないものを「妄想」、現実には起こらないと自覚した思

考を「空想」と定義し、このうち空想のみを対象とする。

また、この空想と攻撃性の関連を検討した研究では、空想内容と攻撃性の関連が明らかになっている (岡田・竹田, 2025a)。具体的には、大学生を対象に BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙および空想内容に関する自由記述を含む質問紙調査が行われた。空想内容と性別を独立変数、攻撃性を従属変数とした二要因分散分析を行った結果、空想の有無において短気性・敵意性・身体的攻撃性・全攻撃性、空想内の自死の有無において短気性・敵意性・全攻撃性、空想内の他死の有無において敵意性に主効果が、空想内の自傷度において敵意性・全攻撃性に関連の可能性が認められている。つまり、攻撃性が高いと空想を行いやすく、さらに自身が被害を受ける空想を行いやすいということである。また、この自傷度と空想の関連については岡田・竹田 (2025b) の研究においても関連の可能性が示唆されており、攻撃性が高い群では他の群と比較して自身の心や体が傷つく空想を行う割合が高いとされている。

これらの知見から、空想は攻撃性と関連する日常的解離であり、行動化する前の攻撃性が高いほど自身が被害を受ける空想を行う傾向が示唆されているものの、その過程などの関連の詳細は明らかになってはいない。廣澤 (2010) は、近年解離的なものの見方が蔓延し、「病的な解離」の増加よりも日常場面における「解離的な対処方法」の浸透の方が目につくとされ、今後解離という心理機制がどのようなメカニズムで働いているのかを、非臨床群を対象とした調査などを通して明らかにすることが重要であるとしている。同時に、正常解離についての理解を深めることは、教育相談やカウンセリングにおいて現代の若者を理解し支援していくために、有益であるとしている。そこで、岡田・竹田 (2025a) に続く基礎研究として日常的解離の下位分類と攻撃性の関連及び機能、つまり攻撃性がどのように空想に現れ、攻撃性の状態性にどのように影響を与えるのかを明らかにすることが求められる。解離が感情に影響を与える可能性があることとされていることから、攻撃性と関連が見られた空想にも感情に影響を与える可能性が考えられる。このような攻撃性と空想内容の作用や過程を明らかにすることで、これらの構成概念に関する機能や関連性を明らかにできるのではないだろうか。

以上を踏まえ、本研究では上記の 8 分類における「うわの空・空想」、特に空想と攻撃性との関連を BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙と空想内容についての自由記述を含めた 11 件法の質問紙を用いて縦断調査を行うことで、攻撃性と空想内容の関連の経時的変化を含めた過程を検討すると同時に、その過程の作用の検討を行う。なお、経時的変化や過程の検討には交差遅延効果モデルを用いる。交差遅延

効果モデルは、2時点以上の縦断データから変数間の効果を検討するモデルであり、1時点でのデータが、別の時点の変数に対して影響があるかを検討することができる。このモデルを用いた研究に大学における学修経験が成績に及ぼす影響過程（古里・劉，2023）があり、大学1年次・3年次の2時点の学習経験とGPA及び卒業時のGPAの縦断データの分析を行っている。

なお、交差遅延効果モデルを行うにあたり、本研究における攻撃性は、状態性を含むと捉えている。攻撃性は、時間をまたいで一定の安定性を示すとされているが（例えば3週間の再検査相関 $r = .70-.80$; 安藤他，1999）、一方で「短気」や「敵意」は再検査相関が比較的低い結果を示す研究もある（例えば3週間の「短気」・「敵意」の再検査相関 $r = .54-.68$; Webster et al., 2014）。また、攻撃性を「攻撃行動を誘発する不快感と内的攻撃欲求（攻撃動因）を含む、攻撃行動が生起する仕組み」と位置付ける例もある（山口，1996）。以上のことから、本研究では、攻撃性を「特性を主としつつ状態的成分を含む混合概念」として位置づけ、T1-T2の交差遅延では自己相関（安定性）を統制した上で、残差に含まれる状態変動を捉える。また、同様に日常的解離および空想内の自傷度も「状態」概念として扱う。いずれも、注意・自己感・感情処理などの統合が一時的に緩む心理過程や、直近の出来事・情動に依存する想起内容に基づくため、短期スパンで変動しうる可変的な体験と考えられる。

仮説として、攻撃性は同時点の空想において怪我するなどの自身が傷つく被害的な内容として現れると考えられる。そしてその空想に、敵意などの感情に影響を与える機能がある場合、次時点の攻撃性を上下させると考えられる。Lynn & Rhue (1988)によると空想は孤独や苦痛、怒りに対して適応的あるいは補償的に機能する可能性があるともされており、被害的な空想が適応的あるいは補償的に機能する場合、1時点の被害的な空想内容から次時点の攻撃性への負のパスが示されると考えられる。以上を踏まえ、交差遅延効果モデルでは、T1 敵意から T1 空想内自傷度（心）へ正のパスが示され、T1 空想内自傷度（心）から T2 敵意へ負のパスが示されるといった可能性が考えられる。その他にも、T1 身体的攻撃から T1 空想内自傷度（身体）へ正のパスが示され、T1 空想内自傷度（身体）から T2 言語的攻撃性へ負のパスが示されるといった、攻撃性毎の空想への表れ方や空想を介した別の攻撃性への影響が示される可能性も考えられる。

方法

調査時期

本研究における調査は2025年5月22日～7月14日に実施した。

調査対象者

本研究はT1からT3の3時点において調査を行った。ただし3時点すべての回答を得られた人数が少なく、交差遅延効果モデルでの分析が不安定となる可能性が考えられるため、連続した2時点の回答を得られた者を調査対象とした。つまりT1とT2またはT2とT3（T1の回答は無し）の2時点の回答を得られた者を対象とした¹。この対象者は私立大学に通う大学生161名（男性60名、女性101名）であり、平均年齢は18.8歳（ $SD = 0.79$ ）であった²。

質問紙の構成

本調査における質問紙はフェイスシート、攻撃性に関する質問項目、最近の空想に関する質問項目から構成されている。

フェイスシートでは、調査対象者の調査参加の同意の有無、性別、年齢、別時点のデータとの紐づけのためのパスコードの回答を求めた。調査参加の同意の有無の項目では、調査の参加が自由な意思に基づいていることを明記した。パスコードの項目では別時点のデータとの紐づけのために使用することを明記し、自由にコードを設定させた。

攻撃性の測定にはBAQ日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（安藤他，1999）を使用した。本尺度は、Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）を基に作成された日本版であり、逆転項目と無関項目を含む全24項目から構成される。攻撃性を、情動的側面である「短気」、認知的側面である「敵意」、さらに行動的側面である「身体的攻撃」および「言語的攻撃」の4つの下位尺度によって捉えるもので、各項目は5件法で回答を求める形式である。下位尺度の構成は、「短気」が5項目（例：「かっとなることを抑えるのが難しいときがある」）、「敵意」が7項目（例：「陰で人から笑われているように思うことがある」）、「身体的攻撃」が7項目（例：「なぐられたら、なぐり返すと思う」）、「言

1 なおT1とT2の回答が得られ、T3の回答を得られなかったのは19名、T2とT3の回答が得られ、T1の回答を得られなかったのは45名であった。T1の回答を得られなかった人数が多いのは、下記するグループ2における1週目の講義受講者が少なかったためであると考えられる。

2 なおT1からT3の3時点の回答を得られたのは、私立大学に通う大学生98名（男性40名、女性58名）であり、平均年齢は18.8歳（ $SD=0.80$ ）であった。

語的攻撃」が 5 項目（例：「意見が対立したときは、議論しないと気がすまない」）となっており、得点が高いほど攻撃性が高いことを示す。本質問紙の信頼性についてはクロンバックの α 係数を含む複数の指標によって確認されており、妥当性についても因子の妥当性をはじめとした複数の方法により支持されている。

最近の空想に関する質問項目は岡田・竹田（2025a）の研究を元に今回の調査で新たに作成した。質問内容は、(a) 最近の空想の程度、(b) 空想内の自傷度について聞くものに分かれている。また、空想について記入を求める際、上記の「現実には起こらないこと・起こりにくいことの想像」という空想の定義を示した。

(a) 最近の空想の程度では、最近の空想について「0 全く行わない」-「10 常に行う」の 11 件法で回答を求めた。(b) 空想内の自傷度では、最近行った空想において自身の身体が傷つくか、自身の心が傷つくかどうかについて、「あなたが最近行った空想の中で自分の身体は傷つきましたか。」といった項目を用いて有無を 2 件法で、「どの程度傷つきましたか。」といった項目を用いてその程度を「0 全く傷つかない」-「10 とても傷ついた」の 11 件法で回答を求めた。

手続き

本研究の調査では、調査概要、フェイスシート、攻撃性に関する項目、および最近の空想に関する項目から成る質問紙を Qualtrics 上で作成した。質問紙の配布は大学教員 5 名に依頼し、教員が担当する 3 つの講義内において実施した。

本研究の調査は 2 グループに対して実施し、週に一度の調査を 3 度行った。なお、グループ 1 では一つの講義で週に一度の調査を 3 度行った。グループ 2 では、同曜日に開講時間の違う 2 つの講義で調査を行い、1 週目は 2 週目・3 週目と別の講義であった。

また、この 1 週間毎の調査頻度は、攻撃性や空想の変動を考慮し設定した。攻撃性は状態性と気質性に分けられることが多く、状態性は短期間で変化しやすく、気質性は変化しにくいと考えられている。そのため、攻撃性の変動は数分から数年単位で起こると考えられ、様々な頻度での縦断研究が行われている。空想の変動については、検討されている研究がなく、変動やその速度については不明である。しかし、空想は内的要因に基づくと考えられることから常に変動し続けていると考えられる。以上を踏まえ、本研究では 1 週間毎の頻度で調査を行った。

倫理的配慮

攻撃性と空想内容の作用や過程を明らかにすることを試みる本研究は、パーソナリティ心理学に基づ

く基礎的な研究であるといえる。倫理的配慮に十分に留意しながら研究を行った。具体的な倫理的配慮については、質問紙の配布時に、調査参加が自由意思に基づくものであり強制ではないこと、氏名等の個人を特定できる情報は一切収集せず回答内容のみを扱うこと、回答は調査専用サーバーに暗号化して保存され、研究終了後にすべて削除されること、質問紙の構成、調査実施者についての説明を行い、同意する者のみ回答を継続するよう求めた。

結果

まず 2 時点の各攻撃性及び全攻撃性と空想内の自傷度の平均と標準偏差を表 1 に示す。

表 1

時点別の各攻撃性及び全攻撃性と空想内の自傷度の平均と標準偏差

下位尺度	T1		T2	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
短気	12.8 (2.6)	4.43	12.8 (2.6)	4.74
敵意	19.4 (3.2)	4.98	19.3 (3.2)	5.05
身体的攻撃	14.4 (2.4)	5.17	14.4 (2.4)	5.30
言語的攻撃	14.2 (2.8)	4.36	14.3 (2.9)	4.07
全攻撃性	60.9 (2.8)	12.16	60.8 (2.8)	12.46
空想内の自傷度(身体)	0.9	2.13	0.7	1.89
空想内の自傷度(心)	1.5	2.54	1.2	2.48

注) () 内の数字は 1 項目あたりの平均値

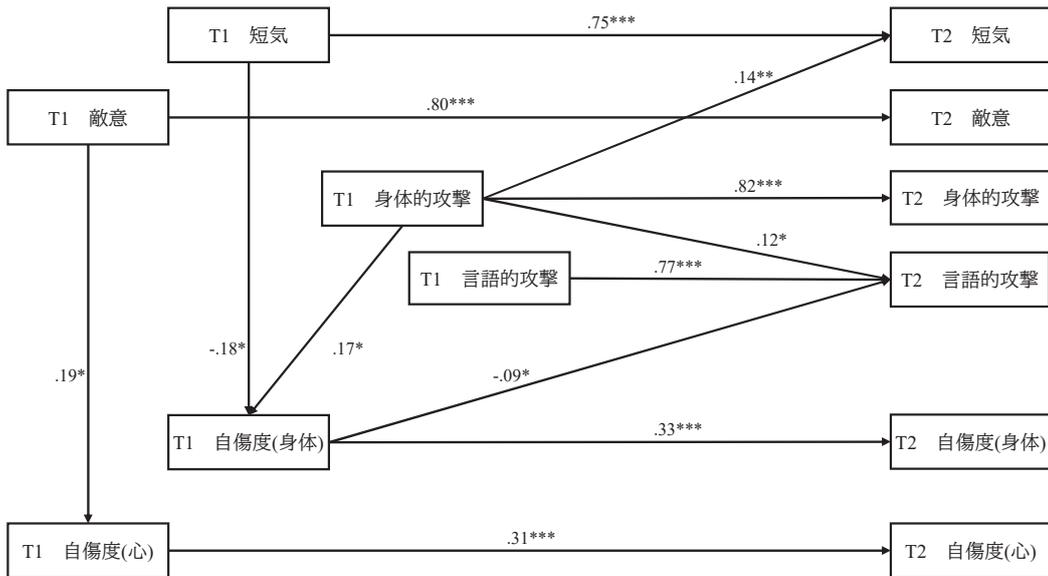
次に、各攻撃性及び空想内の自傷度が 1 週間後の各攻撃性及び空想内の自傷度に影響を与えるのかを検討するために交差遅延効果モデルでの分析を行った。分析にあたり、岡田・竹田（2025a）の研究を元に各攻撃性から同時点の空想内の自傷度に対しては一方方向のパスを引き、それ以外は飽和モデルを設定し分析を行った。その分析によって統計的に有意と示されなかったパスを取り除き、再度分析を行った。その結果を図 1 に示す。なおモデルの適合度は $CMIN = 54.572$, $NFI = 0.938$, $CFI = 0.992$, $RMSEA = 0.029$, $AIC = 138.572$ であり、このモデルが十分に適合していることが示された。

分析の結果、各攻撃性及び空想内の自傷度は T1 から T2 の同項目へのパスが示された。また T1 の身体的攻撃は T2 の短気と言語的攻撃へのパスも示されており、これは攻撃性の中で唯一他の攻撃性へのパスが示されたものであった。

次に攻撃性から空想内の自傷度への影響は T1 の中においてのみ示され、T1 短気から T1 空想内の自傷度（身体）へ負のパス、T1 身体的攻撃から T1 空想内の自傷度（身体）と T1 敵意から T1 空想内の自傷度（心）へ正のパスが示された。

T1 の空想内の自傷度から T2 の攻撃性への影響については、T1 自傷度（身体）から T2 言語的攻撃性への負のパスのみが示された。

図1
各攻撃性と空想内の自傷度の因果関係 (N = 161)



注) CMIN = 54.572, NFI = 0.938, CFI = 0.992, RMSEA = 0.029, AIC = 138.572

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考察

本研究では空想と攻撃性との関連を検討することを目的として、BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙と空想内容についての自由記述を含めた 11 件法の質問紙を用いて大学生を対象に 1 週間毎 3 時点の質問紙調査を行った。データ数の影響から 2 時点のデータを対象とし、各攻撃性及び空想内の自傷度が 1 週間後の各攻撃性及び空想内の自傷度に影響を与えるのかを検討するために交差遅延効果モデルでの分析を行った。

同項目の T1 から T2 への因果関係

分析の結果、まず各攻撃性及び空想内の自傷度は T1 から T2 の同項目へのパスが示された。このことから、T1 の各攻撃性及び空想内の自傷度の高さは T2 の同項目の高さを予測する傾向が明らかになった。つまり、本研究で使用した BAQ 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙で測る怒りの喚起されやすさ、他者に対する否定的な信念・態度、身体的な攻撃反応、言語的な攻撃反応及び空想内における自傷度は 1 週間後概ね変化は起こらず予測できるということである。この空想内における自傷度を予測できるという結果は、本研究で新たに明らかになったことの一つである。

また、T1 の身体的攻撃は T2 の短気と言語的攻撃へのパスも示された。このことから、T1 身体的攻撃の高さは T2 の同項目を予測すると同時に T2 短気と T2 言語的攻撃の高さを予測する傾向が明らかになっ

た。この結果は、質問紙の内容の影響が考えられる。身体攻撃を測る項目では「なぐられたら、なぐり返すと思う」といった短気の要素が入っていると考えられる項目があり、これによって T1 身体的攻撃の高さが T2 短気の高さを予測しているのだと考えられる。また、身体的攻撃は言語的攻撃と同様に行動的側面であるものの、社会的に認められていない方法である。その一方で言語的攻撃を測る項目では「自分の権利は遠慮しないで主張する」といった適応的な要素も入っている。以上を踏まえ、短期ながらも 1 週間という期間を置くことで身体的攻撃は比較的適応的な言語的攻撃へ移行していくため、T1 身体的攻撃の高さが T2 言語的攻撃の高さを予測しているのだと考えられる。

T1 敵意から始まる過程の因果関係

次に T1 敵意から T1 空想内の自傷度 (心) へ正のパス、T1 空想内の自傷度 (心) から T2 空想内の自傷度 (心) へのパスが示された。この T1 敵意から T1 空想内の自傷度 (心) へのパスは岡田・竹田 (2025a) の結果と同様の結果である。このことから、T1 敵意の高さは T1 自傷度 (心) に現れ、その T1 自傷度 (心) の高さは T2 自傷度 (心) の高さを予測するという過程が示唆された。つまり、他者に対する否定的な信念・態度が高い場合、同時点の空想内で自身の心が傷つくという形で現れ、1 週間後の空想内においても同様に自身の心が傷つく空想を行う傾向があるということである。この過程の結果は、防衛機制の観点から説明できる可能性があると考えられる。岡田・竹田 (2025a) の研究では、攻撃性の短気性、敵意性は

行動化する以前の段階であり、これは自身の願望と現実のギャップによる欲求不満によって起こり、行動的攻撃性はその欲求不満を解消するための対処であると考えられている。以上を踏まえると、現実の精神的な欲求不満、すなわち精神的な被害によって、他者に対する否定的な信念・態度が高くなる一方でその欲求不満が解消できない場合、その欲求不満からの逃避として空想が起こる。しかし、その欲求不満は実際には解消されておらず、逃避先である空想において、社会的に望ましくない攻撃性やそれを持つ自身に対する自罰、原因は自分であるなどの否定的な理屈づけとして自身の心が傷つくという自己への反転が起こっている可能性がある。

自身の心が傷つくという空想は1週間後も同様に行われる一方で、1週間後は攻撃性とのパスが示されなくなるという結果は、自傷度以外の空想内容ははじめとした別の要因の影響が考えられる。岡田・竹田 (2025b) の、空想と攻撃性の関連を質的に検討した研究では、攻撃性の高さは空想の被害的な内容と関連すると同時に、空想内での被害への対処が攻撃性の高さを補償または抑制する可能性が示された。このことから本研究で示された1週間後の自身の心が傷つく空想は攻撃性と関連しているものの、空想内での対処などの要因により補償または抑制された人とされなかった人がおり、結果的に正負共にパスが認められなくなったのだと考えられる。

T1 身体的攻撃から始まる過程の因果関係

次に T1 身体的攻撃から T1 自傷度（身体）へ正のパス、T1 短気から T1 自傷度（身体）へ負のパス、T1 自傷度（身体）から T2 自傷度（身体）と T2 言語的攻撃への正のパスが示された。この T1 短気から T1 空想内の自傷度（身体）への負のパスは岡田・竹田 (2025a) の結果と正負が反対の結果であり、T1 身体的攻撃から T1 空想内の自傷度（身体）へのパスは同研究では見られなかったものである。このことから、T1 身体的攻撃の高さと T1 短気の低さは T1 自傷度（身体）を高め、その T1 自傷度（身体）の高さは T2 自傷度（身体）の高さと T2 言語的攻撃の低さを予測するという過程も示唆された。つまり、暴力への衝動や正当化が高く、怒りの喚起されやすさや抑制困難さが低い場合に、同時点の空想内で自身の身体が傷つくという形で現れる。そして、自身の身体が傷つく空想を行った場合、1週間後の空想内においても同様に自身の身体が傷つく空想が行われ、同時に自己主張や議論傾向が低くなるということである。

この過程の結果においても、防衛機制的観点から説明できる可能性が考えられる。身体的攻撃を測る項目では「なぐられたら、なぐり返すと思う」といった対処的な項目があり、これは物理的な対処が必要

な被害を受けた場合の攻撃性とも考えられる。これを踏まえ、現実の物理的な欲求不満、すなわち物理的な被害によって、暴力への衝動や正当化が高くなると、まず空想への逃避が起こる。しかし、その欲求不満は実際には解消されておらず、物理的な対処行動も行えていないため、逃避先である空想において自身の身体が傷つくという自己への反転が起こっていると考えられる。また、この際の、怒りの喚起されやすさや抑制困難さが高いと、空想内での自身の身体が傷つきにくくなるという結果は、その攻撃性の機能が関係している可能性がある。怒りの喚起されやすさや抑制困難さは、言い換えれば欲求不満に対して素早い対処が求められる場合の機能であり、この高さによって暴力への衝動や正当化を行う上での機能が異なるのではないだろうか。つまり、怒りの喚起されやすさや抑制困難さが高い場合は、素早い対処が必要な場合であり、空想する間もなく具体的な行動が必要となると考えられる。反対に怒りの喚起されやすさや抑制困難度が低い場合、素早い対処は必要ではなく、行動に移すまでに空想という過程を経ることができないのではないだろうか。その後、自身の心が傷つくという空想は1週間後も行われるものの、上記同様、空想内での対処などの要因による補償または抑制の有無によって、パスが示されなくなったのだと考えられる。

空想内において自身の身体が傷つく程度が高いと、1週間後の自己主張や議論傾向が低くなるという結果は、その攻撃性の機能が関係している可能性がある。まず自身の身体が傷つくという空想は暴力への衝動や正当化が必要となる物理的な被害を受けた場合に行われる。また、上記の通り、言語的攻撃には適応的な要素も含まれている。以上を踏まえ、物理的な被害を受けた場合には物理的な対処が優先して想起されやすく、適応的な対処行動には繋がりにくい可能性が考えられる。

まとめと臨床への示唆

以上のことから、空想内における自傷度と各攻撃性には一部経時的な関連が示唆された。具体的には、各攻撃性と空想内の自傷度は1週間後の同項目を予測することが分かった。次に、他者に対する否定的な信念・態度が高い場合、同時点の空想内で自身の心が傷つくという形で現れ、1週間後も同様に自身の心が傷つく空想を行うという過程も示唆された。また、暴力への衝動や正当化が高い場合、同時点の空想内で自身の身体が傷つくという形で現れる一方で、怒りの喚起されやすさや抑制困難さが高い場合は空想内で自身の身体が傷つきにくくなる。そして、自身の身体が傷つく空想を行った場合、1週間後も同様に自身の身体が傷つく空想が行われ、同時に自己主張や議論傾向が低くなるという過程も示唆され

た。これらは防衛機制と各攻撃性の機能の観点で説明できる可能性があり、攻撃性の原因となる欲求不満や被害、その攻撃性の機能に影響を受け、空想内の自傷として現れると考えられる。

本研究の結果は、カウンセリング場面において活用できる可能性が示唆される。例えば、カウンセリングにおいてクライアントから「現実には起こりえないと分かっているながらも殴られることを考えることがある」といった旨の発言が見られた場合、その時点のクライアントは怒りの喚起されやすさや抑制困難が比較的低く、暴力への衝動や正当化が高くなっており、現実において物理的な対処が必要な被害を受けている可能性が考えられる。また、その1週間後はクライアントの自己主張や議論傾向が低くなる可能性も示唆される。本研究では、現実での被害などは直接検討を行っていないため、個別のアセスメントに基づく見立てが必要になるものの、被害の可能性などの必要となる情報を選ぶ上で手がかりとなる可能性が考えられる。以上のことから、空想内容はクライアントに対する見立ての幅を補助するという点で、カウンセリング場面での活用の可能性が示唆された。

また、岡田・竹田 (2025a) は空想と攻撃性の関連の活用について教育場面での活用の可能性を挙げている。足立他 (2005) によると、特に青年期は日常的解離の体験頻度が多いとされており、教育相談や現在の若者の理解への活用は廣澤 (2010) も挙げている。このことから、子どもの防衛機制や攻撃性の発達段階の影響を考慮する必要はあるものの、本研究は上記のような教育場面において活用しやすい可能性が考えられる。具体的には、自身の感情を理解し言語化することが難しかったり、大人に対する開示が少なかったりする子どもに対して、雑談として空想の話をするすることで、空想内容を補助的なアセスメントの手がかりとして用い、子どもの攻撃性を測るという方法である。そこで、自身の心が傷つく空想内容が語られた場合、その子どもが他者に対する否定的な信念・態度が高く、その1週間後には同様の空想が行われている可能性が示唆される。否定的な信念・態度の補償または抑制については、本研究では交差経路が概ね有意ではなかったため、仮説レベルにとどまるものの、補償または抑制されている場合とされていない場合があることが予測できる。ただし、本研究の対象は非臨床群の一般大学生であり、年齢差・文脈差に伴う一般化には留保が必要であるだろう。このように、空想を通して攻撃性の状態を間接的に測ると同時に、1週間後の状態について予測できる可能性が示唆されたのは本研究の初期的な成果であるだろう。なお、平均水準の低さ（床効果の可能性）や自己報告に基づく測定などの制約を踏まえ、適用にあたっては個別性を重視した慎重な運用が望まれる。

本研究の限界と展望として、T2における各攻撃性と空想内の自傷度の因果関係を明らかにすることができなかった。これは、岡田・竹田 (2025b) が発表した、攻撃性の高さを補償または抑制する空想内での被害への対処を本研究では測れなかったためであると考えられる。そのため、空想内での被害への対処やその他の空想内容を測り、各攻撃性との経時的な因果関係を検討することで、攻撃性の高さを補償または抑制する空想を明確にできるのではないだろうか。また、本研究では自身が傷つく空想を行うと回答したデータは少なく、さらに傷つく程度も小さかったことから、さらに豊富なデータを集めることで、より精度の高い分析を行うことができ、今回分析できなかったT3への影響も測ることができるだろう。また、上記の発達段階の影響の検討も行うことで、より有用な活用場面を見出すことができると考えられる。さらに、本研究では床効果が見られている可能性のある項目もあり、得られた結果の活用は限定的であると考えられる。そのため、最近被害的な状況にあった人を対象にするなど、焦点を絞った研究を行うことが有効である可能性が考えられる。

以上のことから空想と攻撃性の経時的関連の研究には有用性があると考えられると同時に、未だ検討されていない部分も多く、今後の研究で知見を蓄積していく必要があると考えられる。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- 足立 卓也・足立 直人・赤沼 のぞみ・武川 吉和・池田 弘司・足立 靖・加藤 康夫・新井 平伊 (2005). 一般成人・青年における解離性体験—日本語版解離性体験尺度 (J-DES) による定量評価— 精神科治療学, 20 (6), 625-628.
- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70 (5), 384-392. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.70.384>
- Buss, A. H., & Perry, M. (1992). The Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63 (3), 452-459. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.63.3.452>
- 古里 由香里・劉 婧 (2023). 大学における学修経験が成績に及ぼす影響過程—交差遅延効果モデルによる検討— 高等教育と学生支援：お茶の水女子大学紀要, 13, 59-67.
- 廣澤 愛子 (2010). 「解離」に関する臨床心理学的考

- 察—「病的解離」から「正常解離」まで— 福井大学教育実践研究, 35, 217-224.
- Ludwig, A. M. (1983). The psychological functions of dissociation. *American Journal of Clinical Hypnosis*, 26 (2), 93-99. <https://doi.org/10.1080/00029157.1983.10404149>
(ラドウィグ, A. M. 市田 勝 (訳) (1996). 解離の精神生物的機能 精神科治療学, 11, 197-201.)
- Lynn, S. J., & Rhue, J. W. (1988). Fantasy proneness: Hypnosis, developmental antecedents, and psychopathology. *American Psychologist*, 43 (1), 35-44. <https://doi.org/10.1037/0003-066X.43.1.35>
- Maaranen, P., Tanskanen, A., Hintikka, J., Honkalampi, K., Haatainen, K., Koivumaa-Honkanen, H., & Viinamäki, H. (2008). The course of dissociation in the general population: a 3-year follow-up study. *Comprehensive Psychiatry*, 49 (3), 269-274. <https://doi.org/10.1016/j.comppsy.2007.04.010>
- 舩田 亮太 (2008). 青年の語りから見た日常的解離の発達について 事例研究による体験・意味づけ変容モデルの検討 パーソナリティ研究, 16 (3), 295-310. <https://doi.org/10.2132/personality.16.295>
- Matsumoto, T., Yamaguchi, A., Asami, T., Okada, T., Yoshikawa, K., & Hirayasu, Y. (2005). Characteristics of self-cutters among male inmates: Association with bulimia and dissociation. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 59 (3), 319-326. <https://doi.org/10.1111/j.1440-1819.2005.01377.x>
- 岡田 太陽・竹田 剛 (2025a). 日常的解離にあたる空想と攻撃性の関連 神戸学院大学心理学研究, 7 (2), 91-99.
- 岡田 太陽・竹田 剛 (2025b). 日常的解離にあたる空想と攻撃性の関連：攻撃性の特徴から見た空想内容 日本心理臨床学会第 44 回大会発表論文集, 426.
- Putnam, F. W. (1993). Dissociative disorders in children: Behavioural profiles and problems. *Child Abuse & Neglect*, 17 (1), 39-45. [https://doi.org/10.1016/0145-2134\(93\)90006-Q](https://doi.org/10.1016/0145-2134(93)90006-Q)
- Steele, K., Boon, S., & van der Hart, O. (2016). Treating Trauma-Related Dissociation: A Practical, Integrative Approach.
(キャシー, K., ブーン, S., & ヴァンディアハート, O. 新谷 宏伸 (訳) (2025). 解離の治療トラウマ関連解離／構造的解離の実践統合アプローチ 金剛出版)
- 田辺 肇 (2002). 解離現象 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 3 異常心理学 I 東京大学出版会 (pp.161-182)
- Webster, G. D., Dewall, C. N., Pond, R. S. Jr., Deckman, T., Jonason, P. K., Le, B. M., Nichols, A. L., Schember, T. O., Crysel, L. C., Crosier, B. S., Smith, C. V., Paddock, E. L., Nezelek, J. B., Kirkpatrick, L. A., Bryan, A. D., & Bator, R. J. (2014). The brief aggression questionnaire: psychometric and behavioral evidence for an efficient measure of trait aggression. *Aggressive Behavior*, 40 (2), 120-139. <https://doi.org/10.1002/ab.21507>
- 山口 浩 (1996). 日常生活における怒りと攻撃性の表出 実験社会心理学研究, 36 (2), 273-286. <https://doi.org/10.2130/jjesp.36.273>
- 吉住 隆弘・村瀬 聡美 (2008). 大学生の解離体験と防衛機制およびコーピングとの関連について パーソナリティ研究, 16 (2), 229-237. <https://doi.org/10.2132/personality.16.229>
- Zlotnick, C., Shea, T., Pearlstein, T., Simpson, E., Costello, E., & Begin, A. (1996). The relationship between dissociative symptoms, alexithymia, impulsivity, sexual abuse, and self-mutilation. *Comprehensive Psychiatry*, 37 (1), 12-16. [https://doi.org/10.1016/S0010-440X\(96\)90044-9](https://doi.org/10.1016/S0010-440X(96)90044-9)